

幼児は「森の絵本」で何に出会うか

—環境絵本に関する量的研究—

今村光章

岐阜大学

What do children meet in the picture books concerning forest?

: Quantitative research on environmental picture-books

IMAMURA Mitsuyuki

Gifu University

キーワード 森, 森の絵本, 幼児, 森の命, 領域「環境」

I はじめに

今日では、多種多様な絵本が多数出版されているが、そのなかには森が描かれている絵本が多々ある。そうした絵本のなかでは、たいてい、木々が生い茂り、草花が描かれ、子どもや大人、動物、想像上の事物といった主人公が登場する。

家庭においても保育所や幼稚園でも、大人たちは幼児（3-6歳児）に、こうした森が描かれた絵本を熱心に読み語る。なぜなら、豊かな自然環境が減少し、直接に自然体験をすることが難しくなった現代社会において、間接的な森の体験であっても、そのような読み語り子どもには重要な学びであると考えからであろう。

自然豊かな森での体験をしたことのない幼児にとって、絵本のなかで出会う森は、おそらく生まれて初めて出会う森である。実際、幼児は絵本というメディアのなかで森に出会い、その世界を体験している。森を実際に体験したことのない幼児にとっての「森」のイメージや知識は、ある程度まで、絵本のなかの疑似体験によって形作られるだろう。そのため、絵本のなかで幼児がどのような森に出会っているのかを明らかにすることは、幼児期の環境教育を考察する上で一定の意義があると考えられる。

そこで、本稿では、森が描かれた絵本のなかで、幼児は森とどのように出会っているか、何に出会うのかを明らかにしたい。どのような種類の動植物を見かけ、どのような視点から森を

見るのか。描かれている「森」のイメージはどのようなものかなどについて明らかにする。具体的には、描かれている動植物、主人公、森の姿、などを分析することで、本稿では森が描かれた絵本のなかで幼児が体験する森について明らかにしていきたい。換言すれば、本論文のサブタイトルに示したように環境絵本に関する量的研究を行うことが目的である。

ここで、幼児期の環境教育の領域において、上述のような問題意識から同様の課題にアプローチした先行研究について概観しておくとして。

たとえば、環境絵本の紹介をした資料（乾 2006）や、環境絵本の紹介と分析を試みる論文（今村 2006, 2007b）、環境教育に用いる絵本を制作したことを報告する文献がある（梅田 2006, 小菅ら 2010）。環境絵本の制作過程が変化に富むため、その多彩な制作過程について言及した論考（今村 2007a）もある。だが、いずれの論文も、「環境絵本」の紹介と分析が中心であったり、制作史に重点が置かれていたりする。本稿のように多くの絵本をとりあげて、できる限り客観的に分析するという問題意識と課題設定とは異なる。

また、動物が描かれた絵本について教育人間学的な見地からアプローチする研究がある（矢野 2002）。矢野は、教育哲学的にも「動物絵本」に鋭い分析を試みているが、環境教育との関連を直接的には考察していない。

このように、森が描かれた絵本について、幼

児期の環境教育の立場から言及した先行研究は散見されるものの数は少ない。そのうえ、ある程度の数の絵本を、客観的、かつ、ある程度まで統計的に調査した論文はない。そのため、絵本を用いた環境教育としても、また、領域「環境」に関する教育・保育、野外保育、たとえば、「森のようちえん (Waldkindergarten)」のような幼児を森で保育する契機としても、広い意味で幼児期の環境教育を拓く布石として、本研究を役立てることができると思う。

II 研究対象とする「森の絵本」

「森」とは何か。「森の絵本」とは何か。まずは、本稿で研究対象とする「森」と「森の絵本」の定義づけをして研究対象を限定しておこう。

まず、本稿において、以下では括弧を付さない森は、「樹木の茂りたったところ」という常識的な意味で用いる。括弧付の「森」は、現実の森ではなく、絵本や児童書、紙芝居などのメディアに書かれた抽象的なイメージや概念としての森という意味で用いることにしよう。森と杜、林、森林、山などの厳密な違いについては、本稿の主たる研究の範囲外であるので、これ以上言及しない。

では、「森の絵本」とは何か。

その定義を厳密に行うことは難しい。主観的な部分も入るため、まずは以下のような客観的な選定基準を設けた。

それらは、①タイトルに「もり」「森」「モリ」が入っていること、②森の絵が描かれていること、および、③物語の中心となる舞台が森であることである。これらの3つの条件を満たす絵本を「森の絵本」としたが、それではあまりに多くの絵本が該当する。そのため、④絵本を読むことで森の疑似体験ができる点も加味した。

この選定基準を用いて、本稿で研究対象とする「森の絵本」の母集団を選定するにあたっては、つぎの2つの方法を用いた。

ひとつは、幼児や児童向けの絵本を選定する上で有意義な国際子ども図書館の蔵書検索を用いること、もうひとつは、絵本のガイドブックや先行研究を手がかりにすることである。

まず、2009年11月22日に、検索のキーワード

を「タイトル：もり・森・モリ、対象：児童書一般」として、国際子ども図書館の蔵書検索を行った。その結果、1989年から2009年までに登録された書籍で、タイトルに「もり」「森」「モリ」が含まれている本を抽出した結果、1006冊あった。だが、それには、小学生以上を対象としているような児童書や図鑑、写真集、科学絵本、理科的要素の入った書籍が含まれていたもので、それらについてはタイトルや内容から判断して対象外とした。その結果、該当する絵本は99冊となった。

つぎに、絵本に関するガイドブックなどを参考に、「森の絵本」と考えられる絵本の情報を集めた。その結果、新たに21冊の絵本を対象とした。

上記の方法で該当した120冊の絵本を実際に読み、「森の絵本」であるか否かを判断した。

その際、まずは、くまのプーさんやアンパンマンなどのシリーズ絵本のなかには、対象になる絵本もあったが、キャラクターとなる主人公が主題であり、「森」が主題ではないと考えられるため対象外とした。④の観点からも、それらの絵本は「森」を疑似体験できるものには程遠かった。

他の絵本についても、森の絵や文章があるかどうか、中心的な舞台が森かどうかという観点から「森の絵本」であるかどうかを判断した。

とくに、以上のように、①～③の3つの条件を満たしていても、森が付随的に描かれているだけの絵本は研究対象外とした。④については主観的な判断が入り込む余地が残るため、論文執筆者とG大学院生とが、まったく独立に④を満たすかどうか判断した。意見が食い違う絵本についてはそれぞれ協議したが、その結果、100%の一致率で「森の絵本」とであると判定した。したがって、研究対象とする「森の絵本」は合計61冊(表1)である。

お断りしておくが、当然のことながら、タイトルに「もり・森・モリ」を含んでいない絵本のなかにも、②～④の要素のすべて、または、いくつかを満たす絵本がある。それらも「森の絵本」ではないかという指摘がなされるはずである。しかし、そのような絵本まで研究対象に含めると、選定作業はきわめて困難になる。そ

ればかりか、対象とする絵本の冊数が膨大なものとなりかねない。さらには、絵本の選定が主観的になりすぎる危険性も入り込む。

こうした点に鑑みて、本稿では、幼児が出会う「森の絵本」について、おおよその傾向を分析し考察するにあたっては、以上の61冊の絵本の分析を行えば、限定的ではあるにせよ可能であると判断する。もちろん、このリストから漏れているような代表的な森に関する絵本もあるが、それを含めた研究については今後の課題としたい。研究対象とする絵本の選定方法に関しても、さらに厳密化する余地も残されているが、それも継続して改善方法を考察したい。

Ⅲ 分析項目

実際に絵本を読んだ上で、分析項目を設定し、誰が何に出会っているのか、背景の森の描かれ方はどのようになっているのかについて、予備的考察を繰り返し試みながら、分析の項目を絞った。結果、以下の(1)～(7)の分析項目を設定した。なお、分析は絵本の本文に限った。

また、以下でのカテゴリー分類にあたっては、論文執筆者とG大学院生と独立に判断した。意見が食い違う部分はそれぞれ協議した結果、100%の一致率であった。

1 主題・テーマ

「森の絵本」が、幼児に何を伝えようとしているのかについて、絵本の主題・テーマを分類した。A～Fの6種類のテーマのなかから、主のテーマと考えられる2つのテーマを選択した。

- A. 森の美しさや神秘性
- B. 森の恩恵や森への感謝
- C. 森での遊び、生活の楽しさ
- D. 森の仕組みと自然界の原理、厳しさ
- E. 自然保護
- F. 人間と動物の交流

2 主人公

物語の主人公の種類を記入し、年代や性別が分かるものに関して調査した。

3 登場物（登場する事物）

物語のなかに登場するものを抽出した。登場物は、①人間、②人間以外の動物、③植物、④想像上の生き物の4つに分類した。

まず、人間は年代が分かるように、子ども・成人・高齢者に分け、さらに、性別を加えて6種類（男の子・女の子・成人男性・成人女性・高齢男性・高齢女性）に分類した。

また、文章中に登場せず、物語の展開には直接かかわっていなくても、「森」の絵のなかに描かれている動物が多数存在する。そのため、絵に描かれている動物をすべて抽出した。幼児は絵を見て物語の世界を楽しむため、絵に描かれた動物との出会いも重要だと考えたからである。

さらに、植物に関しては文章中に名称が記された植物のみを抽出した。絵のなかには多数の植物が描かれているが、絵だけではその種類の判別が困難だからである。

4 舞台の描かれ方

「森の絵本」の舞台（物語の世界）はどのように描かれているのか。人間と動物がどのような関係を持っているのかを分析するために、中心舞台のありかたについて、A～Dの4種類に分類した。

- A. 動物だけの世界
- B. 人間だけの世界
- C. 動物の世界に人間が入る
- D. 人間の世界に動物が入る

5 森に関する場面の変化

「森の絵本」のなかで、森はどのような位置づけがなされているのか明らかにするため、場面の変化を分析した。分類は、以下の3種類である。

- A. 森だけ
- B. 森に行って帰ってくる
- C. 森に行ったまま

6 森の描かれ方

「森の絵本」のなかで森がどのように描かれているのか、絵本から受け取られる森のイメージについては、A～Eの5つのなかから、とくに感じ取られる2つのイメージを選択した。

- A. 楽しい場
- B. 美しい場
- C. 恐ろしい場
- D. 神聖な場
- E. 保護すべき場

7 作者の出身国

表1. 「森の絵本」リスト

タイトル	著者	初版年	出版社	タイトル	著者	初版年	出版社
1 アティと森のともだち	作:イェン・シュニユイ 絵:チャン・ヨウラン 訳:中 由美子	2005	岩崎書店	32 森のおひめさま	作・絵:ジュビレ・フォン・オルファース 訳:秦 理恵子	2003	平凡社
2 あの森へ	作:クレア・A・ニヴオラ 訳:柳田 邦男	2004	評論社	33 もりのおやくそく	作・絵:原 京子	1995	ポプラ社
3 あめのもりのおくりもの おおきなクマさんとちいさなヤマネくん	作・絵:ふくざわ ゆみこ	2006	福音館書店	34 もりのおんがく	作・絵:谷内 こうた	2008	講談社
4 あんこ⑤ 子ネコの「あんこ」里山の森	作:清水 達也 絵:松下 優子	2002	星の環社	35 もりのオンステージ	作:角田 栄子 絵:ひだ きょうこ	2005	文溪堂
5 イーノとダイジョブのおはなし もりでみつけたよ	さこ ももみ	2007	講談社	36 もりのかくれんぼう	作:末吉 暁子 絵:林 明子	1978	偕成社
6 おかあさんともりへ	作:ケイト・バンクス 絵:ゲオルク・ハルンスレーベン 訳:さくま ゆみこ	2002	講談社	37 もりのがっしょうだん	作:たかどの ほうこ 絵:飯野 和好	2003	教育画劇
7 おじいちゃん和森へ	作:ダグラス・ウッド 絵:P.J.リンチ 訳:加藤 則秀	2004	平凡社	38 森の木	作・絵:川端 誠	1997	BL出版
8 くんちゃんのもりのキャンプ	作:ドロシー・マリノ 訳:まさき るりこ	1983	ペンギン社	39 もりのくうちゅうさんぼ あまがえるりょうじや	作・絵:松岡 たつひで	2007	福音館書店
9 こぐまの森	作:本田 ちえこ 絵:本田 哲也	2005	偕成社	40 もりのこえ	作・絵:田代 千里	2003	伊藤忠商事
10 こじまのもりのかわべのピクニック	作・絵:あんびる やすこ	2007	ひさかた チャイルド	41 もりのこびとたち	作・絵:エルサ・ベスコフ 訳:おおつか ゆうぞう	1981	福音館書店
11 こじまのもりのはるになつたらしたいこ と	作・絵:あんびる やすこ	2006	ひさかた チャイルド	42 もりのコンサート	作:水野 政雄 写真:北村 凡夫・水野 政雄	1995	小学館
12 こじまのもりのゆきのひのおみやげ	作・絵:あんびる やすこ	2003	ひさかた チャイルド	43 森のささやき	作・絵:葉 祥明 英訳:リッキーニノミヤ	1999	出版文化社
13 こじまのもりのきんいろのてがみ	作・絵:あんびる やすこ	2004	ひさかた チャイルド	44 もりのさんぼ	作・絵:サイモン・ジェイムズ 訳:木島 始	1995	偕成社
14 ステラもりへいく	作:メアリー＝ルイズ・ゲイ 訳:江國 香織	2003	光村教育図 書	45 もりのせーたー	作:片山 令子 絵:ましま せつこ	2000	PHP研究所
15 ちいさなもり	作:アルベルト・ベネベッリ 絵:ロレッタ・セロフィッリ	2001	講談社	46 もりのせんたくやさん	作:矢部 美智代 絵:田頭 よしたか	2008	フレーベル 館
16 ティモシーとサラとりのようせい	作・絵:ばしょう みどり	2005	ポプラ社	47 もりのてがみ	作:片山 令子 絵:片山 健	2006	福音館書店
17 どんぐりもりのおきやくさん	作:香山 美子 写真:飯村 茂樹ほか	2008	ひさかた チャイルド	48 もりのともだち	作・絵:アンドレ・ダーハン 訳:田島 かの子	2002	小学館
18 ふくろうの森	作:金子 章 絵:土田 義晴	2001	PHP研究所	49 もりのともだち	作・絵:マーシャ・ブラウン 訳:八木田 宣子	1992	富山房
19 ブレブッセとまほうのもり	作:シールス・グラネール 絵:ルイス・モー 訳:やまのうち きよこ	1998	徳間書店	50 もりのなか	作・絵:マリー・ホール・エツツ 訳:まさき るりこ	1963	福音館書店
20 フラニーとメラニーのもりのスープやさん	作:あいはら ひろゆき 絵:あだち なみ	2006	講談社	51 森の中へ	作:アンソニー・ブラウン 訳:灰島 かり	2004	評論社
21 ブルーベリーもりでのプッテのぼうけん	作・絵:エルサ・ベスコフ 訳:おのでら ゆりこ	1997	福音館書店	52 もりのにんぎょう	作・絵:朝比奈 かおる	2005	文溪堂
22 またもりへ	作:マリー・ホール・エツツ 絵:まさき るりこ	1969	福音館書店	53 もりのピアノ	作・絵:いわむら かずお	1989	チャイルド 本社
23 むかし森があったころ	作:デニス・フレミング 訳:木原 悦子	2006	小学館	54 もりのびょういん	作:渡辺 鉄太 絵:加藤 チャコ	2007	福音館書店
24 めざめのもりのいちだいじ	作・絵:ふくざわ ゆみこ	2005	福音館書店	55 もりのふゆじたく	作・絵:たるいし まこ	1992	福音館書店
25 もりいちばんのおともだち おおきなクマさんとちいさなヤマネくん	作・絵:ふくざわ ゆみこ	2002	福音館書店	56 森の水はうたうよ はじめはポツン!	作・絵:かみや しん	2001	岩崎書店
26 森が海をつくる	作・絵:葉 祥明 英訳:リッキーニノミヤ	1997	自由国民社	57 もりのみんなのおともだち	作・絵:原 京子	1996	ポプラ社
27 もりでもぐもぐ	作:つちだ よしはる	1989	福武書店	58 もりのみんなのたんじょうび	作・絵:原 京子	1996	ポプラ社
28 森のアパート	作・絵:竹内 通雅	2002	ピリケン出 版	59 もりのゆうびんきょく	作:舟崎 靖子 絵:舟崎 克彦	1977	偕成社
29 森の絵本	作:長田 弘 絵:荒井 良二	1999	講談社	60 りんごろうくんのもりあるき	作:わたなべ てつた 絵:ながかわ かくだ	2008	アリス館
30 もりのおくでおやすみなさい	作:キャロル・レクサ・シェファー 絵:ヴァネッサ・キャバン 訳:おびか ゆうこ	2001	徳間書店	61 わすれられたもり	作・絵:ローレンス・アンホルト 訳:さくま ゆみこ	2008	徳間書店
31 もりのおくのちいさなひ	作:香山 美子 絵:柿本 幸造	1997	ひさかた チャイルド				

作者の国籍により、国による森のイメージの違いを明らかにするため、作者の出身国を記述した。文と絵で、作者の国籍が異なる場合、両者の国籍をそれぞれ別にカウントした。そのため、文と絵の作者が同一人物の場合、あるいは文と絵の作者の国籍が同じ場合はダブルカウントを行った。

IV 分析結果と個別的考察

各項目の分析結果を以下のようにまとめ、個別に考察を行った。

1 主題・テーマ

主となる主題・テーマを2選択した。該当するものがどうしても1つしかみあたらない場合は、その項目を2つとして選択した。そのため、主題・テーマの分析対象は122件である(表2)。

主題・テーマは、森での遊び・生活の楽しさを伝える絵本が最も多く39件(32%)を占めていた。続いて、森の美しさや神秘性を伝える絵本が31件(25%)であった。「森の絵本」では、幼児に森で遊ぶ楽しさや森の美しさを伝えようとしていることが分かる。(なお、括弧内のパーセンテージについては、小数点第1位以下を四捨五入して整数で示してある。表12を除き、以下でも同様である。)

表2. 主題・テーマ

主題・テーマ	件数(割合)
A. 森の美しさや神秘性	31(25%)
B. 森の恩恵や森への感謝	13(11%)
C. 森での遊び, 生活の楽しさ	39(32%)
D. 森の仕組みと自然界の原理, 厳しさ	14(11%)
E. 自然保護	13(11%)
F. 人間と動物の交流	12(10%)
総計	122

N=122

2 主人公

主人公が明らかな絵本は61冊中59冊であった。主人公が2種類登場する絵本が3冊あり、2種類とも含めた。したがって、分析対象は62件である。

「森の絵本」の主人公は20種類あり、大きく4種類に分類できる。人間, 人間以外の動物, 無生物, 想像上の生き物である。人間以外の動物が30件(48%)と一番多い。つぎに人間が26

件(42%)であった。人間以外の動物で、多く主人公となっていたのは6件の作品に描かれているクマとネズミであった。(表3)

62件の主人公のうち、年代が読み取れたのは、36件であった。その内訳をみると、子どもが圧倒的に多い。31件(人間20件, 動物10件, 小人1件)が子どもである。幼児自身に近い主人公の登場により、物語の世界へと入りこみやすくしていると推察できる(表4)。

表3. 主人公の分類

分類	種類	件数	合計
人間	人間	26	26(42%)
	クマ	6	
人間以外の動物	ネズミ	6	30(48%)
	ヤマネ	3	
	複数の動物	3	
	ウサギ	2	
	キツネ	2	
	イヌ	1	
	サル	1	
	タヌキ	1	
	ネコ	1	
	ヒヒ	1	
	リス	1	
	キジ	1	
	カエル	1	
	無生物	ドンダリ	
人形		1	
想像上の生き物	妖精	2	4(7%)
	小人	1	
	お姫様	1	
総計		62	

N=62

表4. 主人公の年代

年代	件数(割合)
子ども	31(86%)
成人	3(8%)
高齢者	2(6%)
総数	36

N=36

3 登場物

1) 人間

61冊のうち32冊に人間が登場した。約半数の「森の絵本」には、人間が登場していないことになる。人間が複数登場する場合があるため、総計74件の人間がカウントされた。その内訳をみると、男の子が22件, 女の子が19件であった(表5)。

年代では、主人公と同様に子どもが41件(55%)と半数以上を占めていた。成人は22件(30%), 高齢者が11件(15%)である。森の絵本は、読者と同じ子どもが多く登場することが分かった(表6)。性別では、男女で差はほとんど見られなかった(表7)。

4 舞台の描かれ方

物語の世界は、A～D の選択肢のうち2つを選択した。2つ見つからない場合は、ダブルカウントを行っている。どれにも当てはまらない場合、N（その他）と記述した。物語の世界の分析には、61冊、122件を分析の対象とした（表9）。

動物だけの世界を描いた物語が多く52件（43%）を占めていた。一方、人間だけの世界を描いたものは16件（13%）と少なく、「森の絵本」は動物が中心となっていることが分かる。動物の世界に人間が入る絵本も27件（22%）と二番目に多くなっていた。

なお、N（その他）は、想像上の生き物が中心となっている世界を描いたものである。人間や動物ではなく、想像上の生き物の世界を描いた絵本が18件と多いのは、「森の絵本」の特徴である。

表9. 物語の世界

物語の世界	件数(割合)
A. 動物だけの世界	52(43%)
B. 人間だけの世界	16(13%)
C. 動物の世界に人間が入る	27(22%)
D. 人間の世界に動物が入る	9 (7%)
N. その他	18(15%)
総計	122

N=122

5 森に関する場面の变化

場面の变化については、A～Cの選択肢から1つを選択した。そのため、61件が対象である。（表10）

「森の絵本」は、森だけを描いたものが39件（64%）を占めている。森のなかに住んでいる動物の世界、森のなかで生活をする人間の世界を描いているからである。だが、同じ場面をずっと描いているわけではない。森のなかで、小川に行ったり、野原に行ったり、谷に行ったりと移動をしている。森のなかを空から眺める場面もあり、同じ森を描いていても見え方は様々であった。

森に行って帰って来る絵本は、20件（33%）となっている。この種の絵本は、人間が森のなかに散歩に出かけていき、楽しい思い出とともに

に家に帰宅するまでを描いた絵本である。森は、生活の場とは異なり、出かける場所という捉え方が見受けられる。一方、森へ行ったままの絵本は2件（3%）と少なかった。

表10. 場面の变化

	件数(割合)
A. 森だけ	39(64%)
B. 森に行って帰って来る	20(33%)
C. 森に行ったまま	2 (3%)
総計	61

N=61

6 森の描かれ方

森の描かれ方を分析するため、森のイメージの選択肢A～Eのうち2つを選んだ。2つ見つからない場合は、1つをダブルカウントした。よって、61冊、122件を対象に分析を行った（表11）。

表11. 森のイメージ

	件数(割合)
A. 楽しい場	52(43%)
B. 美しい場	44(36%)
C. 恐ろしい場	8 (6%)
D. 神聖な場	13(11%)
E. 保護すべき場	5 (4%)
総計	122

N=122

森の描かれ方のなかで、楽しい場は52件（43%）で最も多く、「森の絵本」を通して、幼児に森の美しさと楽しさなどの魅力を伝えようとしていることが分かる。他方、森の恐ろしさや保護すべき場としてのイメージを与える絵本は少なかった。絵本の冒頭で恐ろしい場としてのイメージを与えることはあっても、実際に「森」に出かけてみると楽しい場所であることがわかるという構造となっていた。保護すべき場のイメージは、人間が森を破壊した現状を伝えられている絵本である。悲惨な状況を描きながら、自然保護が必要な場所である印象を与えている。

ところで、全61冊のうち、日本の絵本（43冊）と海外の絵本（18冊）では、森のイメージに違いがみられる。それぞれ独自に分析したところ、日本の絵本では、楽しい場としてのイメージが49%、次いで美しい場（34%）、恐ろしい場（6%）、神聖な場（7%）、保護すべき場（4%）

であった。日本の「森の絵本」は鮮やかな色彩で描かれることが多く、森が華やかで明るい場所と捉えられることが読み取れる。

他方、海外の絵本は、美しい場のイメージが強いようである。楽しい場としてのイメージが28%で日本のほぼ半数、美しい場が42%で最も多い。恐ろしい場は(8%)、神聖な場が(19%)、保護すべき場が(3%)であった。日本の絵本と比較して、神聖な場をイメージする絵本が多かったことが特徴的である。また、海外の絵本では、白黒のみで描かれている絵本がいくつか見られた。白黒であるからこそ、ミステリアスな側面を描くことができ、神秘的なイメージを与えることもある。

もちろん、わずか18冊の翻訳されている絵本だけのデータを用いているだけなので、早急な結論は避けるべきである。だが、日本の絵本に描かれる「森」と外国の絵本の「森」には違いがあると推定できる。その分析は今後の課題としたい。

7 作者の出身国

絵本では、文章を書く作家と絵を描く書き手が異なる場合がある。そのため、文と絵の作者それぞれの国籍をカウントし、対象は122件となった(表12)。

対象とした「森の絵本」は、日本の絵本が86件(71%)を占めていた。残りの36件(29%)が海外の絵本である。なかでも、アメリカの絵本とイギリスの絵本が多かった。(小数点第2位以下を四捨五入して表12に記入した。)

表12. 作者の出身国

国		小計	合計
日本	日本	86(70.5%)	86(70.5%)
外国	アメリカ	12(9.8%)	36(29.5%)
	イギリス	6(4.9%)	
	スウェーデン	4(3.3%)	
	ドイツ	3(2.5%)	
	アルジェリア	2(1.6%)	
	イタリア	2(1.6%)	
	カナダ	2(1.6%)	
	台湾	2(1.6%)	
	ノルウェー	2(1.6%)	
	アイルランド	1(0.8%)	
総計		122	

N=122

V 全体的考察

「森の絵本」の分析結果を踏まえて、以下の5点が明らかになった。

1 幼児は肯定的なイメージの森に出会う

「森の絵本」のイメージの分析の結果、森の美しさと楽しさの印象を与える絵本が多いことが明らかになった。鮮やかな色彩で描かれた絵本からは、森の楽しさと美しさが読み取れる。

楽しさを感じる絵本は、登場する動物が擬人化されている傾向にある。幼児が登場人物になりきって、森のなかで美しい景色を見たり、遊んだりする体験をすることにより、森のイメージは楽しいものになっていく。衣服を着用し、言葉話す愛らしい擬人化された動物の登場により、幼児は「森」に親しみを感じ、容易に物語の世界へと入っていくことができると考えられる。

一方では、森には不気味で恐ろしいという感じを与える絵本もある。人間を超越した存在が宿るとされている森には、近づきがたく、恐怖心をもたらす側面もある。幼児に森の自然の厳しさと恐ろしさを感じさせる絵本も存在する。

また、前述したように、「森」へのイメージが変化する絵本もある。「森」を怖いものと思っていたが、行ってみると楽しい場所だったと気づくような絵本である。このような主人公の「森」に対するイメージの変容は、読者である幼児がたどる変容でもあるだろう。

ところで、日本の絵本と海外の絵本では、森のイメージが違うことに着目すべき点である。日本の絵本は、明るい色彩を用いて描かれることが多く、森の楽しさが伝わってくるのが特徴的であった。海外の絵本においても、森の楽しさや美しさを伝える絵本が多いことは同様であるが、神聖な場としてのイメージが日本の絵本よりも強い。これらの違いは、文化の違い、森をどのように捉えているかの違いにあると考えられる。

このように「森の絵本」は、親しみやすく楽しい森を描き出す場合と、恐ろしく怖い森を描く場合があるが、一般的には楽しいイメージを抱かせるものが多い。幼児は、「森の絵本」では、明るく楽しいという意味で、肯定的なイメージ

の「森」に出会うのである。

2 幼児は動物に出会う

「森の絵本」では、人間が登場する絵本がほぼ半数であったのに対し、必ず動物が登場する。動物が中心の世界が描かれ、動物は森に欠かせない存在となっている。

「森の絵本」に描かれる世界では、動物だけが描かれていることが43%と最も多く、続いて動物の世界に人間が入る絵本が22%と多かった。このように、「森の絵本」においては、「森」は人間の生活の場というよりは、動物が住んでいる場所という認識が強い。人間が登場する場合も、動物が生活をする森に人間が出かけていくという物語の展開が見られ、森が自分たちの住む場所とは少し距離のある場として捉えられている。

また、「森の絵本」で登場する人間以外の動物は、クマやリス、ネズミ、ウサギが多かった。それらの動物は日本の絵本においても、海外の絵本においても登場する動物である。登場する動物の違いを見てみると、その国の特色がでてくる。ドイツの絵本にはバブーンやヒヒが登場し、アメリカの絵本にはウッドチャックやオウムが見られた。一方、ヤマネやタヌキなどは日本の絵本のみに出てきていた。登場する動物は、その国の森の生態系や地形、文化が反映されていると考えられる。

いずれにしても、森で実際の動物を直接に見る以前に、幼児は「森の絵本」で動物たちに出会う。人工化された生活環境のなかで、自然のなかで実物に触れる前にこのような動物たちに出会い、そのイメージを膨らませていることがわかる。その意味でも、「森の絵本」は、人間と動物の違いを理解するために必要なメディアであることが分かる。

3 マクロとミクロの両方の視点から森を見る

なぜ、「森の絵本」では、昆虫とトリの出現が多いのか。

まず、昆虫について考察してみよう。61冊のなかに、127件もの昆虫が登場していた。昆虫は、絵だけで登場することが多い。それは、昆虫がストーリー上特別な役割を担っていないことが多いからである。だが、森を描く際に昆虫は欠

かせない存在である。それゆえ、風景の一部にさりげなく昆虫が登場していると考えられる。昆虫は、森の絵を細部にいたるまでじっくりと見ることによってようやく出会える存在である。凝視を求めているともいえるだろう。

また、昆虫を登場させることにより、より低い視線から森を見ることが可能になる効果があると考えられる。昆虫が中心に描かれる絵では、周りの物も大きく映り、迫力がある。普段なら見えないような細かい花の様子や、土のなかの風景を見ることが出来る。昆虫の視点は、ミクロの世界へと子ども達を引き込んでいくのである。ミクロの世界は、普段気がつかないような小さな世界にも、人間と同じように命があると気づかせてくれる。

登場人物になりきって絵本を見ることが出来る幼児だからこそ、小さな世界にある命を体験することができるのではないだろうか。昆虫の視点をを用いることにより、世界は人間だけではなく様々な動植物の命があり、共に生きていくことの大切さを伝える効果があると考えられる。

つぎに、トリについて考察してみよう。トリも「森」への視点を変える役割がある。空から「森」を眺める視線はトリ特有のものであるからだ。陸上の動物だけでは描かれる森の幅が限定されてしまう。けれども、トリを登場させることで、上空から見下ろした「森」、遠く離れた所から眺めた「森」、木の上から見る「森」を描くことが可能になる。トリは、「森」の広大さと奥深さを伝える役割を担っているのである。

以上のように、昆虫やトリの視点は、ミクロの世界やマクロの世界を描くことを可能にする。普段とは異なる視点から森の姿を見ることにより、森のなかには様々な動植物の命があることに気づくのである。

4 想像上の生き物が伝えるメッセージ

「森の絵本」には、想像上の生き物が登場する。それらはどのように分類でき、幼児に何を伝えようとしているのだろうか。

想像上の生き物が出てくる絵本は、2種類に分類することができる。ひとつは、森全体が生き物であるといったようなアニミズム的世界観を示す絵本であり、もうひとつは、想像上の生

き物が森のなかに住んでいて、森のなかを案内してくれる役割を担っている絵本である。

前者の絵本は、森自体が読者に森の美しさ、森の大切さを語りかけている。森全体が持っている生態系の命が描かれる。森では、様々な動植物の命が絡み合っている。太陽の光、雨、風などの森の自然現象も、木々を茂らせ、食べものをつくり、命の恵みを与えてくれる。だが、生きるために他の生き物を食べる動物もいれば、洪水などの天災によって命が失われる危険性もある。「森の絵本」は、幼児に森に個々の命ある動物だけではなく、存在する命のつながりと、そこで生きる厳しさを暗黙のうちに伝えている。

後者は、登場人物の目の前に現れ、「森」の素敵な場所を案内し、「森」での楽しい遊びを伝えてくれる存在となっている。

想像上の生き物のなかでも、とくに精霊が多く登場する。そのことは、森には神様が宿っていると考える人間の文化が影響していると考えられる。日本には、鬱蒼とした竹林や川上の森林が、神の宿るあるいは神が降りてくる神聖な場であるという考え方がある。海外においても、森が聖なるものとして信仰の対象になる。

人間の世界を超越する存在や、得体のしれない存在が出てくることで、森の不思議さや神秘性が感じられる。森や山を聖なる領域と考える神聖視が、「森の絵本」に登場する精霊の姿に反映されている。絵本を通じて、人間の森に対する畏敬の念を子ども達に伝えていると分析できる。

このように、人間の世界を超越した崇高な存在である命にも幼児は出会う。「森の絵本」に登場する精霊や神様に出会い、幼児は森に対する恐れと敬いの心を伝承し、時として、森を破壊する人間の驕りと愚かさにも気付くのであろう。

5 作者が「森の絵本」で伝えたいこと

「森の絵本」を通して、作者は何を伝えようとしているのか。書き手の意図を探ってみよう。

「森の絵本」のテーマは、大きく2つに分類できた。森の美しさや楽しさ等をテーマとし、森に誘い込むような絵本と、森の生態系の厳しさや自然保護を訴えることをテーマとする絵本である。研究対象とした「森の絵本」は前者を扱うものが多かった。それらは、ファンタジーの

世界を描いた物語絵本が多い。動物の森での楽しい生活や人間が森へ遊びに行く様子を描くことで、森遊びの楽しさを伝えようとしている。

いま、森は日本人にとって生活の場からは離れている。そのため、森という日常からは少し離れた場所へ出かけていくストーリーを展開することによって、森の魅力を伝えようとしているといえるだろう。日常の世界とは違う面白さ、不思議さ、怖さを描いているからこそ、幼児は「森の絵本」に引き込まれていくのではないだろうか。

一方、森という自然の厳しさを示す絵は、淡々とした口調で語られており、説明的であるように看取できる。絵本を読むことで、人間が木々を切り倒し、自然を壊してきた事実を知ることができる。また、森の精霊や森の声などの想像上の生き物を使用することにより、「森を守ろうね」「森を大切にしてください」というメッセージを語りかける絵本もあった。精霊という姿を借りて、森の大切さについて直接的な方法で伝えていると言える。

「森の絵本」には、読者を森へ引き込みたいという思いと、壊された自然に気付いて欲しいという願いが込められていると看取できる。

VI 「森の絵本」の環境教育的な意義

「森の絵本」のなかで、幼児は何に出会うのか。それが本論文の課題であった。再確認しておこう。

まず、「森の絵本」では、幼児は多くの動物ばかりではなく、果実が実る植物をはじめ、たくさんの植物と出会う。精霊や神様などのような、いわゆる森の命ともいえるものにも出会っている。

また、ミクロの目からもマクロの目からも「森」を見ることができる。そして、森に対して肯定的なイメージを抱き、畏敬の念を抱くようになる。

では、このような「森の絵本」を幼児期の環境教育においてどのように役立てることができるのだろうか。

第一に、幼児が絵本のなかで間接的に「森」と出会うことそれ自体が、幼児期の環境教育として有意義であると考えられる。「森の絵本」を

用いた環境教育という活動を一層充実させることが大切である。

第二に、幼児を森などの自然が豊かな場所へ誘うきっかけを生み出す道具として「森の絵本」を用いることができる。幼児が豊かな自然環境に肯定的なイメージを持てるようにする教育方法のひとつとして用いることもできる。つまり、幼児が直接的な自然体験をする前の環境教育の準備段階ともなると考えられる。ただし、あまりに手段化される点については慎重になるべきであろう。

第三に、メディアのなかの「森」や自然の描かれ方を検討することで、幼児ばかりではなく大人の自然観と人間観を問い直すこともできる。「森」が人間の制御が不能な自然として描かれている場合と管理可能な環境として描かれている場合がある。自然とは何か。環境とはどのように違うのか。そして、人間は自然の一部であるか否か。そのような哲学的課題に取り組む契機が絵本の中にも垣間見える。

ここでは、幼児が「森の絵本」で出会うものは何かという主題にアプローチしたが、一般化してみることができるだろう。現実の森に出会えない大人たちが、「森」を表現したメディアによって何に出会わされているのか。そのメディアの意図は何か。そこに踏み込むきっかけになる。「森の絵本」は、人間と森、ひいては自然とのかかわり方を考えるきっかけを与えてくれているのである。

今後の課題は、こうした研究方法をさらに精査し厳密化して、できる限り客観的に環境教育の立場から絵本を分析する方法論を開発することである。また、絵本を用いた幼児期の環境教育のあり方についてさらに考察を深めたい。

引用文献

- 乾淑子, 2006, 「環境絵本のすすめ」, 環境教育, 16 (1): 52-55.
- 今村光章, 2006, 「絵本による幼児期の消費者教育の可能性を求めて: 消費者教育的な視点からみた『花咲き山』分析の試み」, 消費者教育, 26: 171-181.
- 今村光章, 2007a, 「『環境絵本』の分類と制作過程の意義」, 環境教育, 17 (1): 23-35.
- 今村光章, 2007b, 「幼児期の環境教育の契機としての環境絵本の意義」, 岐阜大学教育学部紀要 人文科学, 56 (1): 131-140.
- 小菅拓真・坂本勝己・若月惣太・綿貫理明, 2010, 「自然な複合現実の実現に向けた環境教育絵本: 第1回川崎国際環境技術展2009への出展」, 専修ネットワーク&インフォメーション, (16): 19-23.
- 梅田真樹, 2006, 「環境教育としての絵本作成の試み」, 東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要, 3: 71, 2006.
- 矢野智司, 2002, 『動物絵本をめぐる冒険: 動物-人間学のレッスン』, 勁草書房, 東京, 242pp.